

自ら学び続ける子どもを育てる

～自分の思いを追求し、主体的に学びを深めることに重点をおいた国語科の授業研究～

明石市立二見北小学校
主幹教諭 加古 久見子

1 取組の内容・方法

子ども達一人一人が、「自分の思いを相手に分かりやすく、自分の言葉で表現し、自分と友達の考えを比べ、新たな気づきを生み出す」という思考を深めることはもちろん、みんなまで学ぶことの楽しさを感じさせることが、主体的に学び続ける子どもを育てることにつながると考える。言葉で互いに表現し合い、深められる確かな学びの場で、みんなまで学ぶことにより、新たな発見をし、思考が深まり、学ぶ楽しさ、達成感・満足感を実感する。子ども達に「言葉の力」をどのように付けていくのか、また、子ども達の言語生活の中で、思いや考えを表すのにどのような言葉を選んで表現すればよいかを自分の言葉で考え、自分の思いをもつ子をどのように育てるかという研究を積み重ねる必要があると感じる。また、次期学習指導要領では、児童が課題の発見と解決に向けて主体的・対話的に学ぶ学習や、そのための指導の方法などを充実させていく必要があり、授業改善が望まれている。何より、子どもたちが「話したい！聞きたい！書きたい！読みたい！」と思えるように、学習を進めることが一番重要である。そこで、一人一人が自分の思いを主体的に追求し、学びを深めることに重点をおいた国語科の授業研究・単元づくりの充実を図りたいと考えた。

(1) 重点取組

○付けたい力を明確にし、児童が主体的に取り組める意図的な単元構想・・・図1-①
・付けたい力を明確にし、児童が、自分の思いを追求したくなる場とするための単元づくりを考えた

○「わたしなり」の考えをつくる場の設定
＝一人学び・・・図1-②

・「話し合い」をするためには、まず、自分の思いをもたなければならない。国語科では、教材文と出あったとき、自分の読みをもつことが大切である。読みの段階で、自分なりに感じたことをつかめていないと、集団で交流しても自分の思いを出すことができない。しかし、一人学びの方法を知らなければ一人で読み、自分の思いを生み出すことはできない。授業の中で「一人学び」の方法を知らせ、「一人学び」の場を保証することで、自分の思いを生み出していく時間を確保する必要がある。そこで、学習の手引きやワークシート、学習の足跡の掲示など子ども達が自分の考え（読み）をもつことができるような支援を考えた。

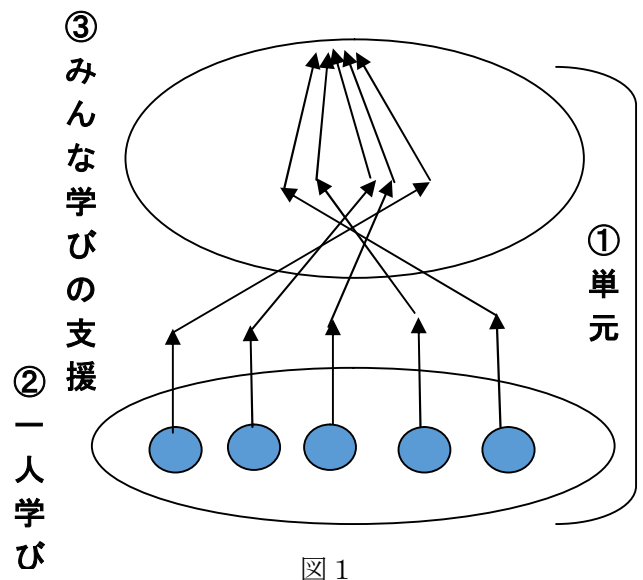


図1

○1年「くちばし」（写真3・4・5）

最初に鳥について知っていることを出し合い、鳥全体に関することが出され、くちばしと羽があるということが出た。そこで、「くちばし」を描いてみようといふ絵を描かせた。子ども達が様々な形のくちばしを描いたので、似た形に分類すると、「どうして形が違うのか。」という疑問が出てきた。「人間なら口だから食べ物に関係があるのではないか。」という意見もあり、

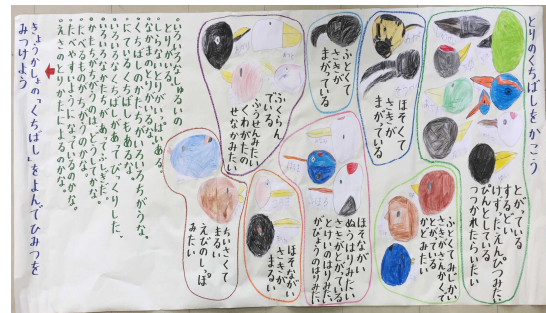


写真3【分類したくちばしと出た意見の掲示物】

「じゃあ、教科書でくちばしのひみつを見つけていこう。」と教材文を読んだ。教材文を読む必然性をもたせたのである。教材文を読み、構成を確かめ、話題提示の意味、問いと答えがあることなどについて気付いたことを出し合う時間をとった。そして、自分たちも問いと答えを作って増やしたいと意欲が高まったところで学習のゴールを決めた。教師が考えていたことだが、子ども達自ら考えたという意識をもたせ、学習計画を共有した。そして、「ずかんとはどんなものか」全員で共通理解し、自分たちの図鑑には何を書くのか、教科書で見つけていこうとくわしい読みに入った。このように思考のつながりを大事にしてきた。

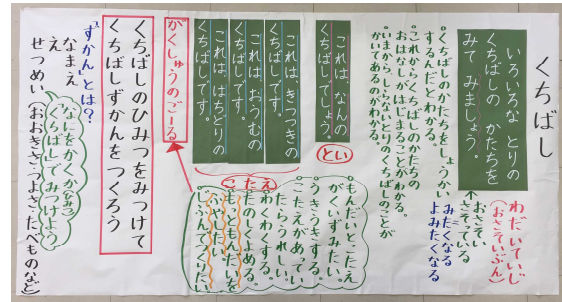


写真4【初めて読んで出たことをまとめた掲示物】

「導入」では、低学年では、「早くやりたい！」とわくわくするような関心を高める活動を十分に

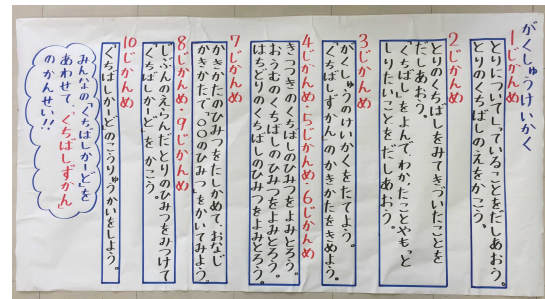


写真5【学習計画】

行い、高学年では、知的な刺激を与えるようにした。例えば、6年「時計の時間と心の時間」では、まず、時間についての自分の考えを書かせた。教材文を読む前に自分の考えを書いてみるとその話題について、関心が高まり、教材文を読む必然性が生まれるのである。

②一人学び

自分の思いをつくるためにまず自分で教材を読むということが大切である。どんな視点で読むのか、どんなやり方で読むのかを教えないといけない。「はなのみち」では、本文を正しく視写し、本文と挿絵を手がかりに自分の考えたせりふや文を自由に書かせた。ひらがなを学習中だったので、書けない文字は○で書かせひらがなを書いてやりなぞらせた。まずの中に書いていくと自由に想像を膨らませたことが書きにくい児童もいたので、自由に書けるようにまず目は使わなかった。まず目に正しく書けるようにするためには、国語ノートに名前を書いたり言葉集めをしたり、丁寧に視写したりさせた。「くちばし」では、本文の言葉からイメージを広げ書かせる欄を作った。書きにくい児童には書き出しやヒントなどを書き入れた個別のワークシートをわたしたり、個別に対話して、本文にサイドラインを引いたり書き出しを書いてやったりした。どの子も「書きたい」という思いがある

ので、ヒントが書いてあるワークシートがあると書きやすくなり、どんどん書き込んでいける子が増える。何枚か個別の物をわたすと「今日は自分で書く。」という児童も出てきた。ワークシートを作るときには、教科書本文の言葉や文を「書き抜く」だけでなく、それを根拠にどんなことがわかるのか、イメージできるのかなど「思ったことや気付いたこと」を書き入れる欄を作るようにした。

③ 深め合う場での教師の支援

1時間の中で必ず児童が「えっ」と立ち止まって考え、思考を深める場面を設定した。ゆさぶりの発問だけでなく、プリントを配布したり、板書に注目させたり様々な手立てが考えられる。自分の考えを発言する際、根拠となる言葉だけを話している児童には、理由も言えるように促している。さらに、詳しく言えるように問い返すことも多い。学習の足跡を掲示し、視覚的に場面のつながりが確かめられるようにしたり、深める助けになる文を黒板に掲示したりすることも有効である。

(例) 「はちどりのくちばしがおうむのくちばしだったらどうですか。」という発問について
の話し合いの後、提示した文

とびながら、はなにくちばしをさしこんでみつをすいます。くちばしですうのではなく、ながいしたをくちばしからだいれして、みつをなめます。

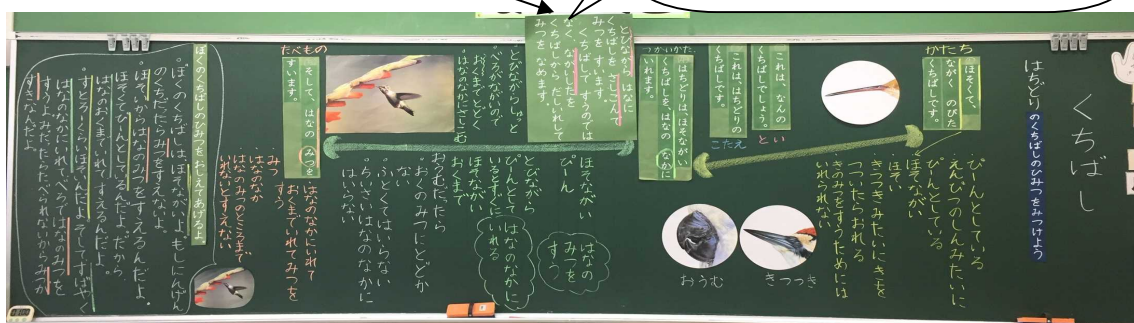


写真6【深める発問の話し合い後に提示した文を貼った板書（中央上部）】

2 取組の成果

- (1) 単元の導入の工夫により、学習のゴールが共有化され、見通しをもち主体的に学習を進める児童が増えた。
- (2) 児童の実態に応じた言語活動を行うことにより、意欲をもって楽しく学習に取り組む姿が見られた。
- (3) 一人学びの方法の工夫（ノート、ワークシート）により、言葉に着目した読みをし、自信をもち、思いを表現する児童が増えた。

3 課題及び今後の取組の方向

主体的に学び続ける子どもを育てることは、本校全教職員で取り組む必要がある。今後も、言葉にこだわり、言葉を通して一人で読む力を付けるために、一人学びの方法・手引きの提示の仕方などの研究を深めていきたい。また、子どもたちが互いに練り合い、思考を深めるために教師はどのようなゆさぶりをかけたらよいのかということを考えていくこと、「国語が好き！」という主体的に学ぶ子どもが増えるような単元構想・授業づくりについての研究を続けていきたい。